

第7回 日本臨床薬理学会 関東・甲信越地方会を終えて

東京大学医科学研究所国際先端医療社会連携研究部門

湯地 晃一郎

会期：2023年6月24日（土）11：00～16：00

会場：Web 開催

会長：湯地晃一郎（東京大学医科学研究所国際先端医療社会連携研究部門）

テーマ：伝染病のワクチン開発と薬物療法

1. 開催概要

第7回 日本臨床薬理学会 関東・甲信越地方会を2023年6月24日（土）に、Web 開催いたしました。153名の方にご参加いただきました。プログラム概要を **Table 1** に記載いたします。参加登録者へは、事前にプログラム・抄録集を郵送し、メール配信でオンライン会場のURLとパスワードを通知しました。

2. 教育講演

教育講演では、東京大学医科学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野 石井 健教授に「そのワクチン安全ですか？にこたえるために必要なワクチンサイエンス」と題し、ワクチンの有効性、安全性を科学的に議論するための理論基盤についてご講演いただきました。内容は、コロナウイルスの歴史、mRNA ワクチンをはじめとするワクチン開発の歴史、ワクチンで防げる病気（VPD）、ワクチンの将来像、課題、「ワクチン開発100日ミッション」など、基礎研究・臨床実装・一般啓発を含む多岐にわたりました。治験・臨床研究に携わる医療従事者にとって、ワクチンについて深く学べる機会となりました。

3. シンポジウム

シンポジウムではまず、パンデミック下の薬物治験に関して、治験に携わった医師・治験コーディネーター・製薬企業・治験支援企業・薬剤経済学者から、ご講演いただきました。内容は、米国国立衛生研究所主導の ACTT 試験をはじめとする国際共同医師主導治験ならびに企業治験の実施経験と今後の課題、軽症中等症患者を対象とした臨床試験の経験と課題、企業治験の用法用量設定と第2/3相試験の結果、治験支援企業のeリクルートメントの経験、コ

ロ禍における医薬品開発と評価、など、それぞれの立場で困難の中で治験に携わられた経験を含み、示唆に富むものでした。講演後には総合討論を実施し、植田真一郎理事長にもご参加をいただき、地方会ならではの踏み込んだ質疑応答を行うことができました。シンポジスト5名中3名に現地会場（東京大学医科学研究所）に当日お越しいただいたため、円滑な進行が可能でした（**Photo.**）。演者の先生方に感謝申し上げます。

4. 一般演題（ポスター）

一般演題（4演題）では、医師、薬剤師により薬物治療に関する臨床研究をご発表いただきました。Zoomのブレイクアウトルームを利用し、発表者と視聴者でフリートークセッションを行いました。昨年と比べ演題は少なめでしたが、各ブレイクアウトルームで活発な議論が行われました。

5. アンケート結果

本会終了後に参加登録者に参加証・領収証をメール送信する際に、開催後アンケートを実施しました。方法は、Google Spreadsheetの回答フォームをメール配信し、無記名で行いました。回答数は36/130名（回答率28%：2023年8月4日時点）でした。属性は、会員16名（44%）、非会員20名（56%）で、職種（複数選択可）は、医師9名（25%）、薬剤師4名（11%）、看護師13名（36%）、臨床検査技師7名（19%）、CRC21名（58%）、会社員3名（8%）、研究職4名（11%）、治験・臨床研究事務局1名（3%）でした。所属（複数の場合は主となる勤務先）は、大学・大病院20名（56%）、一般病院7名（19%）、CRO/CMO6名（17%）、SMO2名（6%）、製薬企業1名（3%）でした。

著者連絡先：湯地晃一郎 東京大学医科学研究所国際先端医療社会連携研究部門 〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1

TEL：03-3443-8111 E-mail：yuji-ty@umin.ac.jp

投稿受付2023年8月16日、第2稿受付2023年9月5日、掲載決定2023年9月5日

ISSN 0388-1601 Copyright：©2023 the Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics (JSCPT)

Table 1 プログラム

教育講演 11:05-12:00

そのワクチン安全ですか？にこたえるために必要なワクチンサイエンス

演者：東京大学医科学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野 石井 健

座長：北里研究所病院 研究部 蓮沼 智子

一般演題 フリーディスカッション 12:00-13:15

1. 日本における抗精神病薬による心室不整脈リスクの調査：自発報告症例の検討

橋口 正行, 志賀 剛

(東京慈恵会医科大学臨床薬理学)

2. ニルマトレルビル/リトナビルとタクロリムスの相互作用により急性腎障害を来した肝移植後 COVID-19 の症例

大柿 景子¹, 大友 慎也¹, 大竹 孝明², 大西 康晴³, 眞田 幸弘³, 平田 雄大³, 堀内 俊男³, 大豆生田 尚彦³, 佐久間 康成³, 今井 靖^{1,4}

(1:自治医科大学附属病院 薬剤部 2:国際医療福祉大学病院 消化器内科 3:自治医科大学 消化器一般移植外科 4:自治医科大学 臨床薬理学)

3. フレカイニドにより心室頻拍となった症例での薬物動態とQRS幅の経過

大谷 直由, 國分 厚彦, 水口 聡, 野村 藍菜, 巴 崇, 杉山 拓史, 杉村 浩之, 安 隆則

(獨協医科大学日光医療センター循環器病センター)

4. 喫煙がテオフィリン血中濃度に影響したと思われる1例

松本 直樹, 太田 有紀, 木田 圭亮, 武半 優子, 大滝 正訓, 小林 司, 飯利 太郎

(聖マリアンナ医科大学 薬理学)

シンポジウム 伝染病の薬物治療 13:15-15:55

座長：自治医科大学 臨床薬理学部門 今井 靖

東京大学医科学研究所 国際先端医療社会連携研究部門 湯地 晃一郎

講演 13:15-15:15

演題1 エンシトレルビルの治験 治験分担医師の立場から ～当センターにおける COVID-19 流行下の治験の経験～

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 齋藤 翔

演題2 治験コーディネーターの立場から

東京大学医科学研究所附属病院 TR・治験センター 河野 美那子

演題3 製薬企業の立場から

塩野義製薬 臨床薬理担当 清水 亮輔

演題4 治験支援企業の立場から

株式会社 Buzzreach 治験事業本部 井上 忠

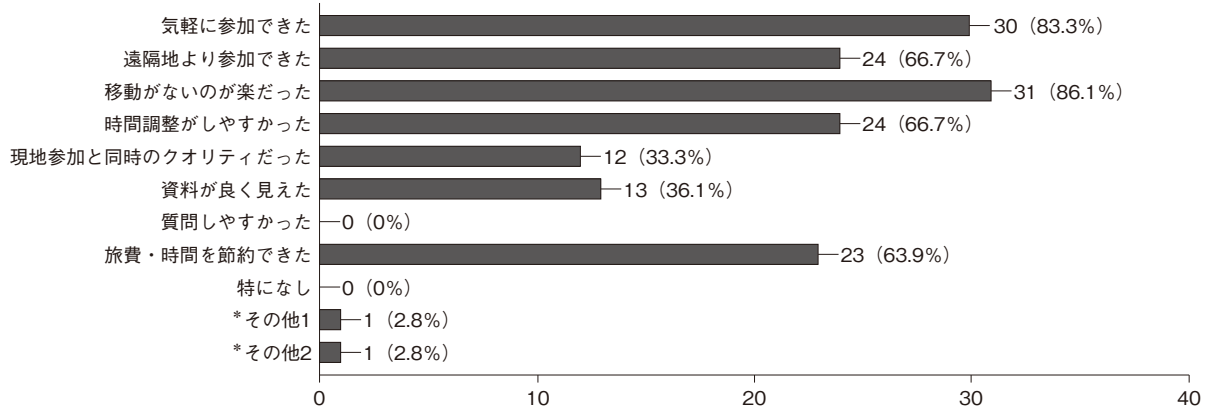
演題5 コロナ禍の医薬品開発と評価 薬剤経済学者の立場から

横浜市立大学医学部 公衆衛生学 五十嵐 中

総合討論 15:25-15:55

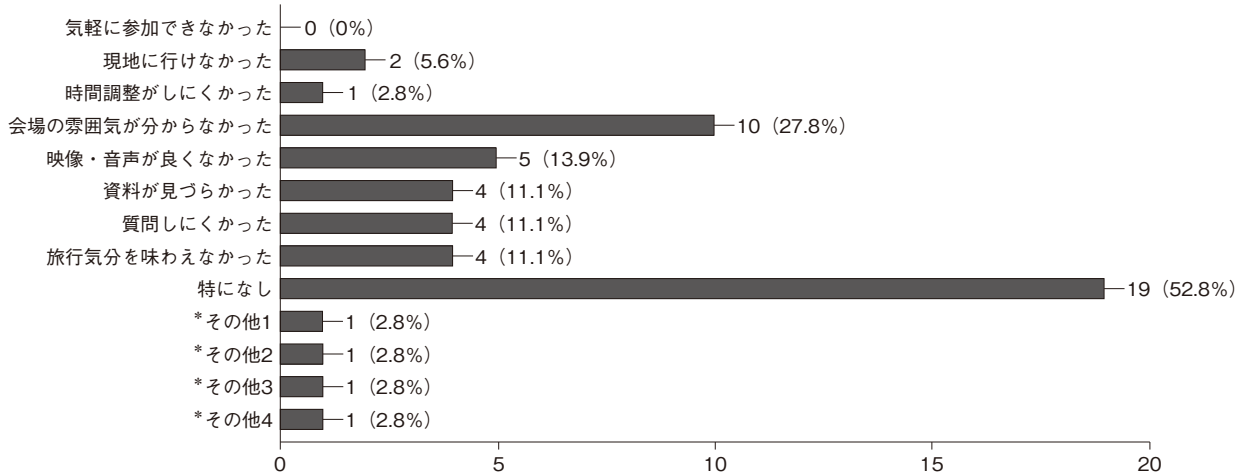
Photo. シンポジウム演者, 座長, 当日スタッフ

a. 今回の学会がWeb開催で良かったことをご回答ください（該当全てをご選択ください）



*その他1：現地開催の場合参加出来なかったため、地方会はオンライン開催がありがたい。
 *その他2：教育講演のテーマ、内容は時宜にかなっていた。ポスターで丁寧に説明いただいた。

b. 今回の学会がWeb開催で悪かったことをご回答ください（該当全てをご選択ください）



*その他1：iPadから視聴していましたが、スライド送りのタイミングでほとんどの講演で次ページに切り替わらず、音声とポインターだけが進んでいる感じでした。何度も入り直したり接続し直したりしましたが改善されませんでした。これまでの学会・セミナー等でZOOMは度々使用していますが、このような不具合は発生したことがなく、この不具合のために講演も集中して聴けず、資料も先に進まなかったため見る事が出来ず、大変残念でした。オンデマンド配信等、ご検討頂けるとありがたいです。

*その他2：一部音声がクリアでなかった。

*その他3：シンポジウム等はWebで問題ないが、一般演題は工夫しないと難しいと感じました。

*その他4：ポスターを一覧できなかった。シンポジウムは質問しにくかった。一部音声がクリアでなかったり、マイクをONにしたままで雑談？のようなものが聞こえました。

Figure 1 今回の学会が「Web開催で良かったこと」「悪かったこと」の内訳（複数回答可）
 延べ回答数 a：n=159, b：n=53

所属地方会支部は、関東・甲信越支部 18 名（50%）、九州・沖縄支部 1 名（3%）、所属支部なし 17 名（47%）でした。職種は、CRC、医師、臨床検査技師が大部分で、所属は大学・大学病院が過半数を占めました。昨年に比べ、非会員・CRC の参加者が多く、過半数を占めました。

次に、「Web開催について」の回答を Figure 1 に示します。「良かったこと」（回答数 159）の方が、「良くなかったこと」（延べ回答数 53）より多いことが示されました。「良

かった」では、移動がないのが楽だった（86%）、気軽に参加できた（83%）、時間調整がしやすかった（67%）、遠隔地より参加できた（67%）、旅費・時間を節約できた（64%）が主な回答でした。「良くなかった」では、会場の雰囲気がわからなかった（28%）、映像・音声が良くなかった（14%）、資料が見つらなかった（11%）、質問しにくかった（11%）、旅行気分を味わえなかった（11%）が主な回答でした。映像・音声が良くなかった（14%）は昨年とほぼ同

一般演題の満足度 (ブレイクアウトルームでの質疑応答) をお聞かせください

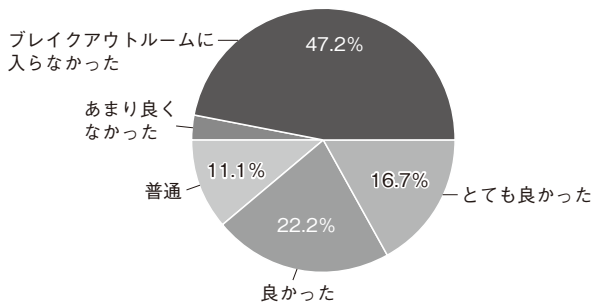


Figure 2 一般演題の満足度 (回答数 n=36)

Table 2 一般演題 (ブレイクアウトルームでの質疑応答) について

- 途中入室でもスライド内容が最初からわかるシステムだと、なお良いと思いました。
- せっかくの交流の機会ですので、参加者には一時でも顔出しをお願いしたいと思いました。
- 入室したときカメラオフで戸惑いましたので、常にカメラオンにさせていただけると良いと思いました。
- 参加者が少なく残念でした。他の演題を聞きに行くために退出するのも気が引けました。
- やはり視聴方法の効率は良いとは言えない。
- 自身のペースで演題内容をみれない事が残念だった。
- コアタイムは設定されていましたが、説明の途中で入室された場合等に対応が難しかったのではないのでしょうか。

今後の地方開催にあたり希望するものをご回答ください (該当全てをご選択ください)

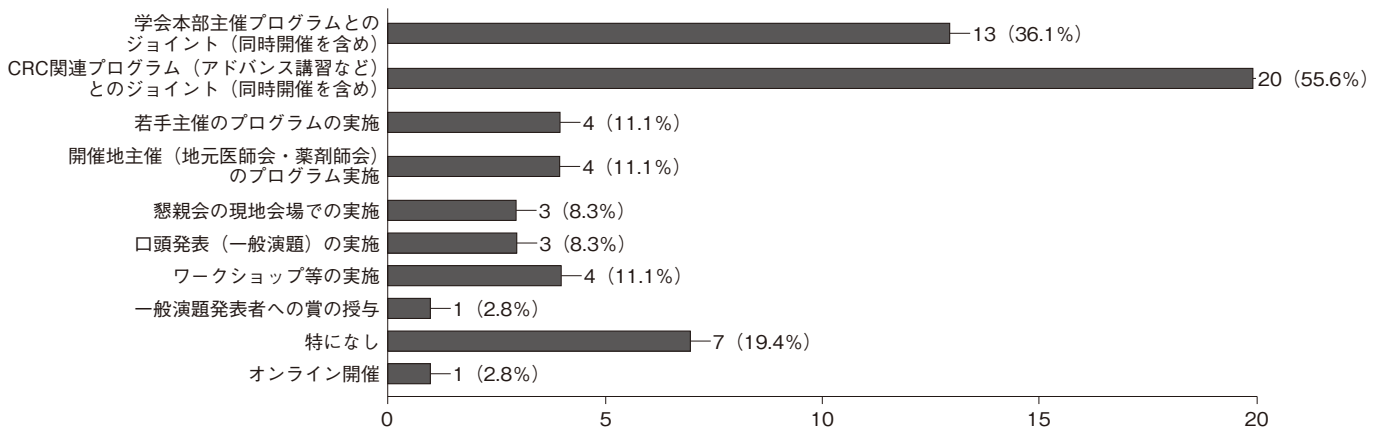


Figure 3 今後の地方会の開催にあたって、希望するもの (延べ回答数 n=60)

率、それ以外は昨年より低率でした。

次に、「一般演題の満足度」の回答を Figure 2 に示します。ブレイクアウトルームでの質疑応答については、とても良かった、良かった、普通が合わせて50%、あまり良くなかったが3%、ブレイクアウトルームに入らなかったが47%でした。自由記載を Table 2 に示します。

次に、「今後の地方会開催形式について」(複数回答可)は、今回のWeb開催が良いが19名(53%)、ハイブリッド形式が良いが15名(42%)、現地開催が良いが2名(5%)でした。昨年よりも、Web完全開催希望が多い結果となりました。

「今後の地方会の開催にあたって、希望するもの」を Figure 3 に示します。CRC関連プログラム(アドバンス講習など)が56%、学会本部主催のプログラムとのジョイントが36%、その他、若手主催のプログラムの実施、開催地主催(地元医師会・薬剤師会)のプログラム実施、ワークショップ等の実施が11%で続きました。学会本部主催の臨床研究・臨床薬理セミナー、ベッドサイドの臨床薬理学、薬理

ゲノミクスセミナー、あるいは、CRC関連プログラムのCRCと臨床試験のあり方を考える会議等と合同で行うことも検討すべきかもしれません。

「地方会で取り上げてもらいたいテーマ」は、パンデミック・有事のシステム構築、臨床研究法、新しい研究デザインなどでした。最後に、「意見・感想等」を Table 3 に記します。

6. 終わりに

関東・甲信越地方会は、「正しい薬物治療の推進などを目的とした学会の設立目標を、より高い次元で達成するため」に、2016年に立ち上げられた会です(第1回 松本直樹会長挨拶文より)。これまで、薬物治療の実践と基礎、医薬品の開発、CRCのキャリアアップ、臨床研究の薬効評価、医師・薬剤師の研究などについて、多職種の参加者が活発に議論してきました。本会も「多職種の人たちによる議論」を継承することができたと考えます。特に、完全Web開催としたことで、非会員のCRCの皆様にも多数ご参加いた

Table 3 自由意見

-
- 11時開始～17時終了はちょうど良かったです。
 - とても有意義な内容で、大変勉強になりました。
 - 次回は対面開催とのことでしたが、可能でしたらハイブリッド開催を希望します。
 - 臨床研究法により研究しにくくなった。
 - 一般演題発表を実施するなら、ある程度の演題数はあった方がよいのではないのでしょうか。
 - ゴコーバの治療に関するトピックばかりでしたがCOIなしなのでしょう？ 他の臨床研究等についても演題としてほしかったです。
 - 演題が多くなく限られていた一方で、上述した不具合により、資料を見ることが出来ずほぼ音声のみとなったため大変残念でした。音声は問題なく聞こえていました（ビデオ画像も問題ありませんでした）。他の学会等で対応されているオンデマンド配信もご検討頂けるとありがたく存じます。
-

だけましたことが、大きな喜びでした。

今回は、自治医科大学薬理学臨床薬理学部門の今井靖先生が会長として開催される予定です。会の成功をお祈り申し上げます。

7. 謝 辞

本会開催にあたり、ご講演、ご発表いただきました演者の先生方、座長の先生方、ご視聴、ご発言いただきました先生方に感謝申し上げます。ご寄附、広告、ご支援を賜りました企業、日本臨床薬理学会に感謝申し上げます。

開催の準備にあたり、全体のご指導をいただきました藤

田朋恵前会長に感謝申し上げます。開催前から終了後まで会員への開催案内のメール配信、演題登録、寄附・広告掲載・謝金の事務処理、会計報告書作成などをご助力いただきました松本直樹支部長、臨床薬理学会事務局に感謝申し上げます。

最後に、企画運営にご指導・ご尽力いただきました東京大学医科学研究所感染免疫内科の安達英輔講師、四柳宏教授、北里研究所病院研究部の蓮沼智子教授、当日、本会の運営にご協力いただきました今井靖次期大会長に厚く御礼申し上げます。